

# 聖大木曜日の聖體礼儀

## 【 晩課 】

司祭) ちち こ せいしん くに あが ほ いま いつ よよ  
父と子と聖神の國は崇め讃めらる、今も何時も世世に、



誦經) (第九時課から続く場合は2ページの「來れ、我等の王・神に叩拜せん」から)

われら かみ こうえい なんぢ き こうえい なんぢ き  
我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

てん おう なぐさ もの しんじつ しん あ ところ もの み ところ もの ばんぜん  
天の王、慰むる者よ、眞實の神、在らざる所なき者、満たざる所なき者よ、萬善

ほうぞう もの せいめい たも しゅ きた われら うち お われら もろもろ けがれ  
の寶藏なる者、生命を賜うの主よ、來りて我等の中に居り、我等を諸の穢より

いさぎよ しぜんしゃ われら たましい すく たま  
潔くせよ、至善者よ、我等の靈を救い給え。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎよ しゅさい われら あやまち  
至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を

ゆる せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よ  
赦せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ  
主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

てん いま われら ちち ねが なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね  
天に在す我等の父よ、願わくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は

てん おこな ごと ち おこな わ にちよう かけ こんにちわれら あた たま われら  
天に行わるるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等

おいめ もの われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いざない みちび なお  
に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶

われら きょうあく すく たま  
我等を凶惡より救い給え。

司祭) けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
蓋 國と權能と光榮は爾 父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、

誦經) アミン。

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ  
主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ  
主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

きた われら おう かみ こうはい  
來れ、我等の王・神に叩拜せん。

きた われら おう かみ こうはいふふく  
來れ、ハリストス・我等の王・神に叩拜俯伏せん。

きた われら おう かみ まえ こうはいふふく  
來れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

【 第103聖詠 ダビドの詠。世界創造の事なり。 】

わ たましい しゅ ほ あ しゅわ かみ なんぢ いた おおい なんぢ こうえい いげん  
我が 靈よ、主を讃め揚げよ、主我が神よ、爾は至りて大なり、爾は光榮と威嚴  
とを被れり。 爾は光を袍の如くに衣、天を幔の如くに張る、水の上に爾の宮  
を建て、雲を爾の車と爲し、風の翼にて行く。 爾は風を以て爾の使者と爲し、焰  
を以て爾の役者と爲す。 爾は地を固き基に建てたり、此れ世に動かざらん。 爾は  
淵を以て衣服の如くに之を覆えり、山の嶺に水立つ。 爾の恐嚇に依りて此れは奔り、  
爾の雷の聲に由りて速に去る。 山に升起、澗に降り、爾の此れが爲に定めし  
ところに至る。 爾界を立てて之を踰えざらしむ、反りて地を覆わざらん。 爾は泉を澗  
に遣せり、山の間には水は流れ、野の諸の獸に飲ましむ、野の驢は其渴を止  
む。 空の鳥は其傍に棲み、枝の間より聲を出す。 爾は上なる宮より山を潤し、  
地は爾の造工の果にて鑿き足れり。 爾は草を獸の爲に生ぜしめ、野菜を人の需の  
爲に生ぜしめて、地より食物を出さしむ。 酒は人の心を樂ませ、膏は其面を  
うるお 澤し、餅は人の心を養う。 主の樹、其植えたるリバンの栢香木は鑿き足れり、鳥は  
其上に巢を造る、松は鶴の棲處たり、高き山は鹿の爲、磐石は兎の爲に避所たり。  
主は月を造りて時を定め、日は其入る處を知る。 爾暗を布けば、則夜あり、其  
ときはやし けものみない めぐ しし えもの ため ほ そのしよく かみ こ ひい かれら  
時 林の獸皆出で廻る、獅は獲物の爲に吼えて、其食を神に乞う。 日出づれば、彼等

あつま おのれ あな ふ ひと そのわざ ため い はたら くれ いた しゅ なんぢ しわざ  
集りて己の穴に伏す。人は其工作の爲に出で、勞きて暮に至る。主よ、爾の工業

なん おお みなちえ もつ つく ち なんぢ ぞうぶつ み か おおい ひろ うみ  
は何ぞ多き、皆智慧を以て作れり、地は爾の造物にて満ちたり。夫の大にして廣き海、

かしこ むすう どうぶつ だいしょう いきもの かしこ ふねかよ かしこ か たいぎよ なんぢ  
彼處には無数の動物、大小の生物あり、彼處には舟通い、彼處には彼の大魚あり、爾

つく そのうち あそ かれら みななんぢ とき したが しよく あた ま これ あた  
造りて其中に遊ばしむ。彼等は皆爾が時に随いて食を予うるを待つ。之に予うれ

う なんぢ て ひら たまもの あ なんぢ かんばせ かく おそ まど そのき と あ  
ば受け、爾の手を開けば賜に暨かさる、爾の顔を隠せば惶れ惑い、其氣を取り上

ぐれば死して塵に歸る。爾の氣を施せば造られ、爾は又地の面を新にす。願く

こうえい よよ しゅ あ ねがわ しゅ おのれ わざ ため たのし かねち み ちふる  
は光榮は世に主に在らん、願くは主は己の造工の爲に樂まん。彼地を觀れば、地震

い、山に觸るれば、煙起つ。我生ける中主に歌い、世を終るまで我が神に歌わん。願

くは我が歌は彼に悦ばれん、我主の爲に樂まん。願くは罪人等は地より消え、不法

もの せん わ たましい しゅ ほ あ  
の者は存するなけん。我が靈よ、主を讃め揚げよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は爾に歸す。

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は爾に歸す。

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は爾に歸す。

## 【 大聯禱 】

司祭) われらあんわ しゅ いの  
我等安和にして主に禱らん、



しゅ あわれ めよ。  
主 憐

司祭) うえ くだ あんわ われら たましい すくい ため しゅ いの  
上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ めよ。  
主 憐

司祭) ぜんせかい あんわ かみ せい しよきょうかい けんりつ およ しゅうじん ごういつ ため しゅ いの  
全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>こ せいどう およ しん つつしみ かみ おそ ころも つ ここ きた もの ため しゅ いの</sup> 此の聖堂、及び信と 慎 と神を畏るる 心 とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>きょうかい つかさど そんき われら ぜんにほん ふしゅきょう しい そんびん</sup> 教會を 司 る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、司祭の尊品、ハリスト

<sup>よ ほさいしよく ことごと きょうしゅう およ しゅうじん ため しゅ いの</sup> スに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>わがくに てんのう およ くに つかさど もの ため しゅ いの</sup> 我國の天皇、及び國を 司 る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>こ まち およそ まち ちほう ため およ しん もつ こ うち お もの ため しゅ いの</sup> 此の都邑と 凡 の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

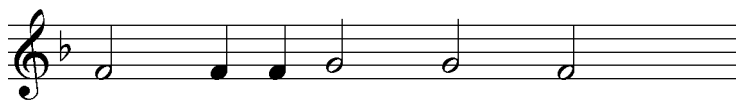
司祭) <sup>きこうじゅんわ ごこくほうじょう てんかたいへい ため しゅ いの</sup> 氣候 順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>こうかい もの りょこう もの やまい うれ もの かんなん あ もの とりこ もの およ</sup> 航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び

<sup>かれら すくい ため しゅ いの</sup> 彼等の救の爲に主に禱らん、



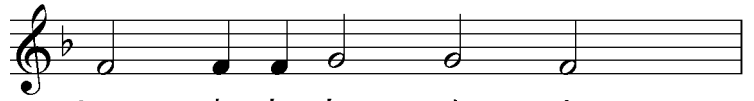
しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>われら もろもろ うれい いかり あやうき まぬが ため しゅ いの</sup> 我等 諸 の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも</sup> 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

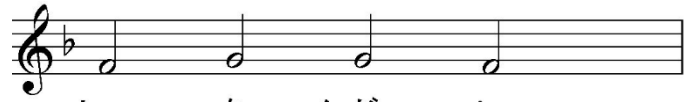


しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ</sup> 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

<sup>しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら</sup> 諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

<sup>いのち もつ かみ いたく</sup> 生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ なんぢ に 。  
主 爾

司祭) ( 黙誦: <sup>こうおん じれん かんにん しじん しゅ われら いのり き われら ねがい</sup> 洪恩にして慈憐、寛忍にして至仁なる主よ、我等の禱を聴き、我等が願

<sup>こえ い めぐみ するし われら あらわ われら なんぢ みち みちび なんぢ しん</sup> の聲を納れ、恩の徴を我等に顯し、我等を爾の途に導きて、爾の眞

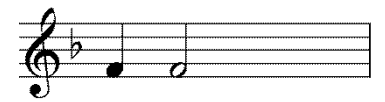
<sup>り ゆ たま われら こころ たのし なんぢ せい な おそ いた</sup> 理に行かしめ給え、我等の心を樂ましめて、爾の聖なる名を畏るるを致させ

<sup>たま けだしなんぢ おおい きせき おこな もの なんぢ ひとりかみ しゅ しよ</sup> 給え、蓋爾は大にして奇蹟を行ふ者なり、爾は獨神なり、主よ、諸

<sup>しん うちなんぢ し もの なんぢ じれん ゆうりよく ゆうき しぜん およ</sup> 神の中爾に如く者なし、爾は慈憐にして有力、勇毅にして至善なり、凡

<sup>なんぢ せい な たの もの たす これ なぐさ これ すく いた</sup> そ爾の聖なる名を恃む者を助け、之を慰め之を救うを致す、 )

司祭) <sup>けだし およ こうえいそんきふくはい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ</sup> 蓋、凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、



ア ミ ン。

【 第140聖詠 第2調 】



しゅよ、なんぢによぶ、すみやかにわれにいたり  
主 爾 呼 速 我 格

誦經) しゅ わくち まもり お わくちびる もん ふせ たま わ こころ よこしま ことば かたぶ  
主よ、我が口に 衛 を置き、我が 唇 の門を扞ぎ給え、我が心に 邪 なる言に傾

きて、不法を行 う人と共に、罪の推 誘せしむる母れ、願わくは我は彼等の甘味を嘗め

ざらん。義人は我を罰すべし、是れ 矜 恤 なり、我を譴むべし、是れ極と 美 しき 膏、我

が首を悩ます能わざる者なり、唯我が 禱 は彼等の悪事に敵す。彼等の首 長 は巖石

あいだ さん わ ことば にゆうわ き われら つち こと き くだ わ ほね ぢごく  
の間に散じ、我が言の柔和なるを聴く。我等を土の如く斫り砕き、我が骨は地獄の  
くち ち お しゅ しゅ ただわ め なんぢ あお われなんぢ たの わ たましい しりぞ  
口に散りて落つ。主よ、主よ、唯我が目は爾を仰ぎ、我爾を恃む、我が靈を退く  
なか わ ため もう わな ふほうしゃ あみ われ まも たま ふけんしゃ おのれ あみ  
る母れ。我が爲に設けられし罫、不法者の網より我を護り給え。不虔者は己の網に  
かか ただわれ す え  
罹り、唯我は過ぐるを得ん。

【 第141聖詠 】

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれしい  
我が聲を以て主に呼び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、我が憂を  
そのまえ あらわ わ たましい うち よわ とき なんぢ われ みち し わ ゆ みち おい  
其前に顯せり。我が靈の衷に弱りし時、爾は私の途を知れり、我が行く路に於て、  
かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと もの われ  
彼等は竊に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我  
のが ところ わ たましい かえりみ もの しゅ われなんぢ よ い なんぢ われ  
に通る所なく、我が靈を顧る者なし。主よ、我爾に呼びて云えり、爾は私の  
かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま われはなはだよわ  
避所なり、生ける者の地に於いて私の分なり。我が呼ぶを聴き給え、我甚弱りたれば  
なり、わ れ はくがい もの すく たま かれら われ つよ  
我を迫害する者より救い給え、彼等は我より強ければなり。

句⑩ わ たましい ひとや ひ いだ われ なんぢ な さんえい たま  
我が靈を獄より引き出して、我に爾の名を讚榮せしめ給え。

讃詞⑩ じん かい は あつ ばんゆう ぞうせいしゅおよ ぞうぶつしゅ わた ため  
イウデヤ人の會は馳せ集まる、萬有の造成主及び造物主をピラトに解さん爲なり。

ああふほう もの ああふしん もの せいししゃ しんぱん ため きた もの しんぱん そな  
嗚呼不法の者や、嗚呼不信の者や、生死者を審判する爲に來らん者を審判に備う、  
くるしみ いや もの くるしみ さだ ごうにん しゅ なんぢ あわれみ おおい かな こうえい なんぢ  
苦を醫す者を苦に定む。恒忍なる主よ、爾の憐は大なる哉、光榮は爾  
き  
に歸す。

句⑨ なんぢおん われ たま とき ぎじん われ めぐ  
爾恩を我に賜わん時、義人は我を環らん。

讃詞⑨ じん かい は あつ ばんゆう ぞうせいしゅおよ ぞうぶつしゅ わた ため  
イウデヤ人の會は馳せ集まる、萬有の造成主及び造物主をピラトに解さん爲なり。

ああふほう もの ああふしん もの せいししゃ しんぱん ため きた もの しんぱん そな  
嗚呼不法の者や、嗚呼不信の者や、生死者を審判する爲に來らん者を審判に備う、  
くるしみ いや もの くるしみ さだ ごうにん しゅ なんぢ あわれみ おおい かな こうえい なんぢ  
苦を醫す者を苦に定む。恒忍なる主よ、爾の憐は大なる哉、光榮は爾  
き  
に歸す。

句⑧ しゅ われふか ところ なんぢ よ しゅ わ こえ き たま  
主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給え、

讃詞⑧ しゅ ふほう ばんさん おい なんぢ とも て さら つ もの ぎん と ため  
主よ、不法なるイウダ、晚餐に於て爾と偕に手を盂に著けし者は、銀を取らん爲に

ふほう もの て の においあぶら あたい はか もの なんぢあたい もの う おそ  
不法の者に手を伸べたり、香膏の價を量りし者は、爾價なき者を賣らんことを畏

れざりき。濯わん爲に足を伸べし者は、<sup>あら ため あし の もの いつわ しゅさい せつぶん これ ふほう もの わた</sup>詐りて主宰に接吻せり、之を不法の者に付  
<sup>ため しと かい はな ぎんさんじゅう なげう なんぢ みつかめ ふくかつ み</sup>さん爲なり。使徒の會を離れ、銀三十を擲ちて、爾の三日目の復活を見ざりき。此  
<sup>ふくかつ よ われら あわれ たま</sup>の復活に因りて我等を憐み給え。

句⑦ <sup>ねが なんぢ みみ わ いのり こえ き い</sup>願わくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

讚詞⑦ <sup>しゅ ふほう ばんさん おい なんぢ とも て さら つ もの ぎん と ため</sup>主よ、不法なるイウダ、晚餐に於て爾と偕に手を盂に著けし者は、銀を取らん爲に  
<sup>ふほう もの て の においあぶら あたい はか もの なんぢあたい もの う おそ</sup>不法の者に手を伸べたり、香膏の價を量りし者は、爾價なき者を賣らんことを畏  
<sup>あら ため あし の もの いつわ しゅさい せつぶん これ ふほう もの わた</sup>れざりき。濯わん爲に足を伸べし者は、詐りて主宰に接吻せり、之を不法の者に付  
<sup>ため しと かい はな ぎんさんじゅう なげう なんぢ みつかめ ふくかつ み</sup>さん爲なり。使徒の會を離れ、銀三十を擲ちて、爾の三日目の復活を見ざりき。此  
<sup>ふくかつ よ われら あわれ たま</sup>の復活に因りて我等を憐み給え。

句⑥ <sup>しゅ も なんぢふほう ただ しゅ だれ よ た しか なんぢ ゆるし ひと</sup>主よ、若し爾不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の  
<sup>なんぢ まえ つつし ため</sup>爾の前に敬まん爲なり。

讚詞⑥ <sup>ばいしゅしやきけつしゃ しゅきゆうせいしゅ ばんゆう しゅさい どれい ごと じん う</sup>賣主者詭譎者たるイウダは主救世主、萬有の主宰を奴隸の如くイウデヤ人に賣  
<sup>いつわり せつぶん もつ これ わた かみ こひつじ ちち こ ひとりだいじんじ もの としよ</sup>りて、詭の接吻を以て之を付せり。神の羔、父の子、獨大仁慈なる者は屠所  
<sup>つ ひつじ ごと か したが</sup>に就く羊の如く、斯く隨えり。

句⑤ <sup>われしゅ のぞ わ たましいしゅ のぞ われかれ ことば たの</sup>我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。

讚詞⑤ <sup>ばいしゅしやきけつしゃ しゅきゆうせいしゅ ばんゆう しゅさい どれい ごと じん う</sup>賣主者詭譎者たるイウダは主救世主、萬有の主宰を奴隸の如くイウデヤ人に賣  
<sup>いつわり せつぶん もつ これ わた かみ こひつじ ちち こ ひとりだいじんじ もの としよ</sup>りて、詭の接吻を以て之を付せり。神の羔、父の子、獨大仁慈なる者は屠所  
<sup>つ ひつじ ごと か したが</sup>に就く羊の如く、斯く隨えり。

句④ <sup>わ たましいしゅ ま ばんにん あさま ばんにん あさま はなはだ</sup>我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

讚詞④ <sup>どれいおよ いつわ もの おこない よ もんとおよ あくほうしゃ ともおよ</sup>奴隸及び詭る者たるイウダは行に由りて門徒及び惡謀者、友及びディアヴォル  
<sup>あらわ けだしふうし したが かれ わた くわだ おのれ うち い これ</sup>と顯れたり。蓋夫子に隨いて、彼を付さんことを企てて、己の衷に謂えり、此を  
<sup>う さんぎょう え かれ においあぶら う いつわり もつ とら はか</sup>賣りて産業を獲んと。彼は香膏をも賣り、イイススをも詭を以て執えんと圖れり、  
<sup>せつぶん な わた ひとりじれん ひと あい もの としよ つ ひつじ ごと</sup>接吻を爲してハリストスを付せり。獨慈憐にして人を愛する者は屠所に就く羊の如  
<sup>か したが</sup>く、斯く隨えり。

句③ <sup>ねが</sup>願わくはイスライリは主を待まん、<sup>しゅ たの</sup>蓋 <sup>けだしあわれみ しゅ</sup>憐 は主にあり、<sup>おおい</sup>大なる <sup>あがない</sup>贖 も彼にあり、<sup>かれ</sup>彼は  
 はイスライリを其 <sup>そのことごと</sup>悉 <sup>ふほう</sup>くの不法より <sup>あがな</sup>贖 わん。

讃詞③ <sup>どれいおよ</sup>奴隷及 <sup>いつわ</sup>び詭 <sup>もの</sup>る者たるイウダは <sup>おこない</sup>行 に由りて <sup>よ</sup>門徒及 <sup>もんとおよ</sup>び悪 <sup>あくほうしゃ</sup>謀者、<sup>ともおよ</sup>友及 <sup>い</sup>びディアヴォル  
 と <sup>あらわ</sup>顯 れたり。蓋 <sup>けだしふうし</sup>夫子に <sup>したが</sup>隨 いて、<sup>かれ わた</sup>彼を付さんことを <sup>くわだ</sup>企 てて、<sup>おのれ</sup>己の <sup>うち</sup>衷に <sup>い</sup>謂えり、<sup>これ</sup>此を  
 う <sup>さんぎょう</sup>賣りて <sup>え</sup>産 業を <sup>かれ</sup>獲んと。彼は <sup>においあぶら</sup>香 膏を <sup>う</sup>も賣り、<sup>いつわり</sup>イススを <sup>もつ</sup>も <sup>とら</sup>詭 を <sup>はか</sup>以て <sup>はか</sup>執えんと <sup>はか</sup>圖れり、  
<sup>せつぶん</sup>接吻を <sup>な</sup>爲して <sup>わた</sup>ハリストスを <sup>ひとりじれん</sup>付せり。獨 <sup>ひと</sup>慈 <sup>あい</sup>憐にして <sup>もの</sup>人を <sup>としよ</sup>愛する者 <sup>つ</sup>は <sup>ひつじ</sup>屠所に <sup>ごと</sup>就く <sup>ごと</sup>羊の如  
 く、<sup>か</sup>斯く <sup>したが</sup>隨 えり。

句② <sup>ばんみん</sup>萬民よ、<sup>しゅ</sup>主を <sup>ほ</sup>讃め <sup>あ</sup>揚げよ、<sup>ばんぞく</sup>萬族よ、<sup>かれ</sup>彼を <sup>あが</sup>崇め <sup>ほ</sup>讃めよ、

讃詞② <sup>つた</sup>イサイヤの <sup>こひつじ</sup>傳えたる <sup>じゆう</sup>羔 は <sup>ほふり</sup>自由なる <sup>ため</sup>屠宰の <sup>ゆ</sup>爲に <sup>そのせ</sup>行き、<sup>むちうち</sup>其背を <sup>あた</sup>答 に <sup>そのほほ</sup>與え、<sup>うつ</sup>其頬を <sup>うつ</sup>批  
 に <sup>あた</sup>與え、<sup>そのおもて</sup>其面を <sup>つばき</sup>唾 <sup>はづかしめ</sup>せらるる <sup>さ</sup>辱 より <sup>みにく</sup>避けざりき、<sup>し</sup>醜 <sup>さだ</sup>き死に <sup>つみ</sup>定めらる。罪なき者は  
<sup>あまん</sup>甘 <sup>いつさい</sup>じて一切を受く、<sup>しゅうじん</sup>衆 人に <sup>し</sup>死よりの <sup>ふくかつ</sup>復 活を <sup>たま</sup>賜わん <sup>ため</sup>爲なり。

句① <sup>けだしかれ</sup>蓋 <sup>われら</sup>彼が我等に <sup>ほどこ</sup>施す <sup>あわれみ</sup>憐 は <sup>おおい</sup>大なり、<sup>しゅ</sup>主の <sup>しんじつ</sup>眞實は <sup>なが</sup>永く <sup>そん</sup>存す。

讃詞① <sup>つた</sup>イサイヤの <sup>こひつじ</sup>傳えたる <sup>じゆう</sup>羔 は <sup>ほふり</sup>自由なる <sup>ため</sup>屠宰の <sup>ゆ</sup>爲に <sup>そのせ</sup>行き、<sup>むちうち</sup>其背を <sup>あた</sup>答 に <sup>そのほほ</sup>與え、<sup>うつ</sup>其頬を <sup>うつ</sup>批  
 に <sup>あた</sup>與え、<sup>そのおもて</sup>其面を <sup>つばき</sup>唾 <sup>はづかしめ</sup>せらるる <sup>さ</sup>辱 より <sup>みにく</sup>避けざりき、<sup>し</sup>醜 <sup>さだ</sup>き死に <sup>つみ</sup>定めらる。罪なき者は  
<sup>あまん</sup>甘 <sup>いつさい</sup>じて一切を受く、<sup>しゅうじん</sup>衆 人に <sup>し</sup>死よりの <sup>ふくかつ</sup>復 活を <sup>たま</sup>賜わん <sup>ため</sup>爲なり。

【 讃詞 第6調 】

こう え い は ち ち と こ と せ い しん に き す 、 い ま も  
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今  
 一 つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
 何 時 世 世  
 一 イ ウ ダ は じ つ に ま む し の る い の す え 、 の に  
 實 蝮 類 裔 野  
 一 マ ン ナ を く ら い て 、 や し な う も の を う ら  
 食 養 者 の を 怨

み た る も の の す え な り 、 け だ し か の  
 者 者 裔 蓋 彼

お ん を し ら ざ る も の は か て な お そ の く ち に あ る  
 恩 知 者 糧 猶 其 口 在

に か み を そ し れ り 、 こ の ふ け ん の も の も て ん  
 神 謗 此 不 虔 者 天

の か て を な お く ち に ふ く み て き ゆ う し ゆ の  
 糧 猶 口 含 救 主

う り わ た し を な せ り 。 あ あ あ か ざ る  
 賣 付 爲 鳴 呼 飽

し つ 、 ざ ん に ん き ょ う ぼ う や 、 お の れ を  
 質 殘 忍 強 暴 己

や し な う も の を う り 、 お の れ が あ い  
 養 者 賣 己 愛

せ し し ゆ さ い を し に わ た す 、 じ つ に か の も  
 主 宰 死 付 す 實 彼 者

の の ふ ほ う の こ に し て 、 か れ ら と と も に  
 不 法 子 彼 等 借

ほ ろ び を つ ぎ た り 。 ひ と り ご う に ん の  
 滅 亡 繼 獨 恒 忍

い い つ く さ れ ぬ し ゆ よ 、 か く の ご と き ざ ん に ん  
 言 盡 主 此 如 殘 忍

よ り わ れ ら の た ま し い を ま ぬ が れ  
 我 等 靈 免



し め た ま え 。  
給

司祭) ( 黙誦: <sup>ばんゆう しゅさい われらくれ あさ ひる なんぢ さんび なんぢ かんしゃ なんぢ き</sup> 萬有の主 宰や、我等 晩と朝と晝に 爾を讚美し、爾に感謝し、爾に祈

<sup>とう われら いのり こうろ かおり ごと なんぢ まえ のぼ われら ころろ</sup> 禱す、我等の 禱を香爐の 香の如く 爾の前に 登らしめ、我等の 心に

<sup>よこしま ことば あるい おもい かたぶ ゆる なか すなわちわれら およ わ たましい</sup> 邪なる言、或は 思に傾くを容す 母れ、乃 我等を凡そ 吾が 靈を

<sup>あみ もの すく たま けだししゅ しゅ われら め なんぢ あお われらなんぢ</sup> 罣する者より 救い給え、蓋 主や、主や、我等の 目は 爾を仰ぎ、我等 爾を

<sup>たの わ かみ われら はづかし なか けだしこうえいそんきふくはい なんぢちち こ</sup> 侍む、我が 神や、我等を 辱むる 母れ、蓋 光榮尊貴 伏拜は 爾父と子と

<sup>せいしん き いま いつ よよ</sup> 聖神に 歸す、今も何時も 世に、アミン。

<sup>えいち つし た</sup> 睿智、 肅みて 立て、

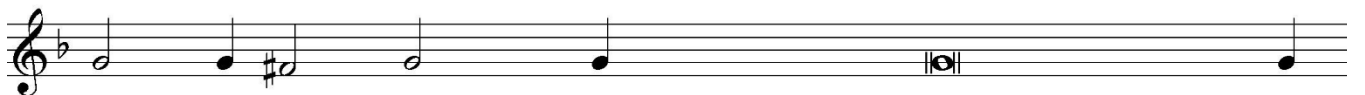
【 聖ソフロニイの祝文 】



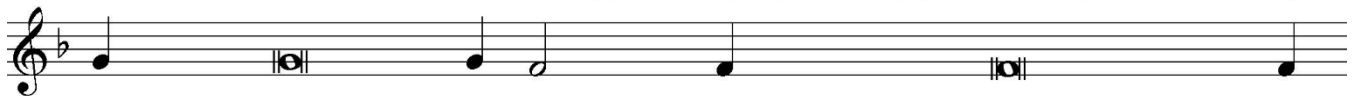
せ い に し て ふ く た る じ ょ う せ い な る て ん の ち ち の  
聖 福 常 生 天 父



せ い な る こ う え い の お だ や か な る ひ か り イ イ  
聖 光 榮 穩 光



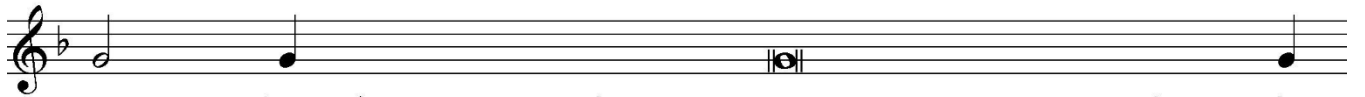
ス ス ク リ ス ト ス よ 、 わ れ ら ひ の い り に い た り く  
我 等 日 入 至 暮



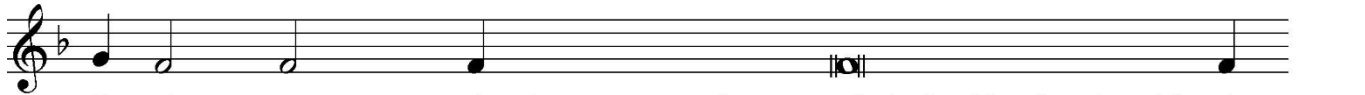
れ の ひ か り を み て 、 か み ち ち と こ と せ い し ん  
光 見 神 父 子 聖 神



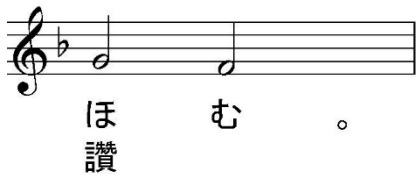
を う た う 。 い の ち を た も う か み の こ  
歌 生 命 賜 神 子



よ 、 なん ぢ は い つ も け い け ん の こ え に て う た わ  
爾 何 時 敬 虔 聲 歌



る べ し 、 ゆ え に せ か い は なん ぢ を あ が め  
故 世 界 爾 を 崇



【 第一の提綱 第139聖詠 第1調 】

司祭) つつし みて<sup>き</sup>聴くべし、衆人<sup>しゅうじん</sup>に平安<sup>へいあん</sup>、睿智<sup>えいち</sup>、つつし みて<sup>き</sup>聴くべし。

誦經) プロキメン、第一<sup>だいいち</sup>の調<sup>しらべ</sup>、主<sup>しゅ</sup>よ、我<sup>われ</sup>を悪人<sup>あくにん</sup>の手<sup>て</sup>より救<sup>すく</sup>い、我<sup>われ</sup>を強暴者<sup>きょうぼうしゃ</sup>より護<sup>まも</sup>り給<sup>たま</sup>え。



誦經) 彼等<sup>かれら</sup>心<sup>こころ</sup>に悪<sup>あく</sup>を謀<sup>はか</sup>り、毎日<sup>まいにち</sup>戦<sup>たたか</sup>を備<sup>そな</sup>う。



誦經) しゅよ、われ<sup>われ</sup>をあくにん<sup>あくにん</sup>の手<sup>て</sup>より救<sup>すく</sup>い、



司祭) えいち 睿智<sup>えいち</sup>、

誦經) エギプト<sup>い</sup>を出<sup>で</sup>づる記<sup>き</sup>の讀<sup>よみ</sup>、

司祭) つつし みて<sup>き</sup>聴くべし、

【 エギプトを出づる記 19章10-19節 】

誦經) しゅ主<sup>しゅ</sup>はモイセイ<sup>い</sup>に謂<sup>い</sup>えり、爾<sup>なんぢ</sup>下<sup>くだ</sup>りて民<sup>たみ</sup>に告<sup>つ</sup>げよ、今日<sup>こんにち</sup>明日<sup>みょうにち</sup>彼等<sup>かれら</sup>を淨<sup>きよ</sup>めよ、彼等<sup>かれら</sup>其<sup>その</sup>衣<sup>ころも</sup>

あら だいさんじつ ため おのれ そな けだしいさんじつ しゅ ざん しゅうみん まえ  
 を 澣い、 第三日の爲に 己を備うべし、 蓋 第三日に主はシナイ山に衆 民の前に  
 くだ なんぢたみ ため まわり さかい もう い つつし やま のぼ なか いささか これ さわ  
 降らん、 爾 民の爲に四周に 界を設けて云え、 慎みて山に登る母れ、 聊も之に捫  
 なか およ やま さわ もの かならずし て これ ふ べ けだしいし もつ う  
 る母れ、 凡そ山に捫る者は 必死せん、 手を之に觸る可からず、 蓋石を以て撃たれ、  
 あるい や もつ いころ かちく ひと ろん い え らっぱ なが な くも  
 或は矢を以て射殺されん、 家畜と人とを論ぜず、 生くるを得ざらん。 角の長く鳴り、 雲  
 やま はな およ かれらやま のぼ う やま くだ たみ いた これ  
 の山より離るるに迫りて、 彼等山に登るを得べしと。 モイセイ山を下り、 民に至りて、 之  
 せい たみそのころも あら かれたみ い だいさんじつ ため おのれ そな つま ちか  
 を聖にし、 民其衣を澣えり。 彼民に謂えり、 第三日の爲に己を備えよ、 妻に近づ  
 なか だいさんじつ あさ およ ざん うえ いかづち いなづま くろくも らっぱ こえ  
 く母れと。 第三日の朝に迫りて、 シナイ山の上に 雷、 電、 黒雲あり、 角の聲  
 はなはだはげ えい あ たみみなふる おのの えい たみ ひき かみ むか  
 甚厲しくして、 營に在る民皆戦い慄けり。 モイセイ營より民を率いて、 神を迎え  
 ため い たみやま ふもと た ざんみなけぶ かみ ひ なか おい そのうえ  
 しめん爲に出でたり、 民山の麓に立てり。 シナイ山皆烟れり、 神が火の中に於て其上  
 くだ よ そのけぶり いろり けぶり ごと た のぼ ぜんざんおおい ふる たみみな  
 に降れるに因りてなり、 其烟は爐の烟の如く立ち騰り、 全山大に震い、 民皆  
 はなはだおそ らっぱ こえいよいよおおい そのな はなはだはげ ことば はつ  
 甚懼れたり。 角の聲彌大にして、 其鳴ること甚厲し、 モイセイ言を發し、  
 かみこえ もつ これ こた  
 神聲を以て之に應えたり。

【 第二の提綱 第58聖詠 第7調 】

プロキメン だいしち しらべ わ かみ われ わ てき たす われ せ もの まも たま  
 誦經) 提綱、 第七の調、 我が神よ、 我を我が敵より援け、 我を攻むる者より護り給え。

わ が か み よ 、 わ れ を わ が て き よ り た す け 、  
 我 神 我 我 敵 援  
 わ れ を せ む る も の よ り ま も り た ま え 。  
 我 攻 者 護 給

われ ふほう おこな もの たす たま  
 誦經) 我を不法を行 う者より援け給え。

わ が か み よ 、 わ れ を わ が て き よ り た す け 、  
 我 神 我 我 敵 援  
 わ れ を せ む る も の よ り ま も り た ま え 。  
 我 攻 者 護 給

わ かみ われ わ てき たす  
 誦經) 我が神よ、 我を我が敵より援け、



われをせむるものよりまもりたまえ。  
我攻者護給

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) イオフ書<sup>しよ よみ</sup>の讀、

司祭) <sup>つつし</sup> 謹みて<sup>き</sup>聽くべし、

【 イオフ書 38章1-23節、42章1-5節 】

誦經) <sup>しゆ おおかげ くも うち い むち ことば もつ ぎ くら もの こ だれ</sup> 主は大風と雲との中よりイオフに謂えり、無知の言を以て議を味ます者は此れ誰ぞや。

<sup>おとこ ごと なんぢ こし つか われなんぢ と なんぢわれ こた われち もとい お とき</sup> 丈夫の如く爾の腰を束ねよ、我爾に問わん、爾我に答えよ。我地の基を置きし時、

<sup>なんぢいつこ あ も さと われ つ だれ そのどりよう さだ なんぢこれ し</sup> 爾安に在りしか、若し悟らば、我に告げよ。誰か其度量を定めたる、爾之を知れる

<sup>だれ はかりなわ そのうえ の そのもとい なに うえ かた そのすみし だれ これ</sup> か、誰か準繩を其上に舒べたる。其基は何の上に固められしか、其隅石は誰か之

<sup>お ぼし つく とき わ ことごと てんし おおい こえ もつ われ さんび</sup> を置きたる。星の造られたる時、我が悉くの天使は大なる聲を以て我を讚美せり。

<sup>うみ わ たいない い とき われもん もつ これ と くも もつ そのころも な くらやみ</sup> 海が湧きて胎内より出でし時、我門を以て之を閉ぢ、雲を以て其衣と爲し、昏黒を

<sup>もつ そのむつき な これ そのかぎり さだ かんぬき もん もう い ここ いた</sup> 以て其襪褌と爲せり、之に其限を定め、鍵と門とを設けて曰えり、此にまで至れ、

<sup>これ こ ここ なんぢ おご なみ ため さかい なんぢうま ひ このかた あさ</sup> 之を踰ゆべからず、此は爾の驕れる浪の爲に界なり。爾生れし日より以來、晨に

<sup>めい くだ あかつき そのところ しめ これ ち きよく いた ふけんしゃ そのうえ</sup> 命を下ししか、暁に其處を示して、之をして地の極を懷きて、不虔者を其上よ

<sup>ふる おと なんぢち ちり もつ い もの つく こ ことば もの ち うえ</sup> り振り落さしめしか。爾地の塵を以て生ける者を造りしか、此の言ある者を地の上に

<sup>お なんぢふけんしゃ ひかり うば おご もの て お なんぢうみ みなもと いた</sup> 置きしか。爾不虔者より光を奪いしか、驕れる者の手を折りしか。爾海の泉源に至

<sup>ふち そこ あゆ し もん おそれ もつ なんぢ ため ひら ちごく もん まも</sup> りしか、淵の底を歩みしか。死の門は畏を以て爾の爲に啓けしか、地獄の門を守る

<sup>もの なんぢ み おそ なんぢてんか ひろさ きわ そのいくばく われ つ ひかり</sup> 者は爾を見て懼れしか。爾天下の廣を窮めしか、其幾何なるかを我に告げよ。光

<sup>いつれ ち す くらやみ あ ところ いつこ なんぢわれ そのさかい みちび う これ</sup> は何の地に住めるか、晦冥の在る處は何處なるか、爾我を其境に導き得るか、此

<sup>ら ゆ みち し なんぢこれ し けだしそのときなんぢすで うま なんぢ とし</sup> 等に往く途を知れるか。爾之を知れるならん、蓋當時爾已に生れたり、爾の年の

<sup>かず おお なんぢゆき くら い ひょう くら み これら なんぢ よう てき とき</sup> 数は多し。爾雪の府庫に入りしか、雹の府庫を見しか、此等は爾の用に、敵のある時、

<sup>いくさ たたかい ひ ため たくわ こた しゆ い われし なんぢ いつさい</sup> 征戦と争鬪との日の爲に蓄えられしか。イオフ答えて主に謂えり、我知る、爾は一切

<sup>よく なんぢはか ところ おい よく ところ し ぎ おお もの だれ</sup> を能す、爾謀る所に於て能せざる所なし。知ることなくして議を蔽う者は誰ぞや。





しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>しせいしけつ</sup> 至聖至潔にして <sup>いた</sup> 至りて <sup>さんび</sup> 讚美たる <sup>われら</sup> 我等の <sup>こうえい</sup> 光榮の <sup>ぢよさい</sup> 女宰、<sup>しょうしんぢよ</sup> 生神女、<sup>えいていどうぢよ</sup> 永貞童女マリヤと、

<sup>しよせいじん</sup> 諸聖人 <sup>きおく</sup> を記憶して、<sup>われらおのれ</sup> 我等己の <sup>みおよ</sup> 身及び <sup>たがい</sup> 互に <sup>おのおの</sup> 各の <sup>み</sup> 身を以て、<sup>もつ</sup> 並に <sup>ならび</sup> 悉く <sup>ことごと</sup> の <sup>われら</sup> 我等の

<sup>いのち</sup> 生命を以て、<sup>もつ</sup> ハリストス <sup>かみ</sup> 神に <sup>いたく</sup> 委託せん、



しゅ な んぢ に 。  
主 爾

司祭) ( 黙誦： <sup>せい</sup> 聖なる <sup>かみ</sup> 神、<sup>せいじゃ</sup> 聖者の中に <sup>うち</sup> 息い、<sup>せいさん</sup> セラフィムより <sup>こえ</sup> 聖三の <sup>もつ</sup> 聲を以て <sup>かしよう</sup> 歌頌せられ、

<sup>さんえい</sup> ヘルヴィムより <sup>ことごと</sup> 讚榮せられ、<sup>てんぐん</sup> 悉くの <sup>ふくはい</sup> 天軍より <sup>ばんぶつ</sup> 伏拜せられ、<sup>む</sup> 萬物を <sup>ゆう</sup> 無より有

<sup>ひと</sup> となし、<sup>なんぢ</sup> 人を <sup>ぞう</sup> 爾の <sup>しょう</sup> 像と <sup>よ</sup> 肖とに <sup>つく</sup> 依りて <sup>なんぢ</sup> 造り、<sup>もろもろ</sup> 爾が <sup>たまもの</sup> 諸の <sup>もつ</sup> 賜を以て <sup>これ</sup> 之を <sup>かざ</sup> 飾

<sup>ねが</sup> り、<sup>もの</sup> 願う者 <sup>ちえ</sup> に <sup>めいご</sup> 智慧と <sup>あた</sup> 明悟とを <sup>つみ</sup> 與え、<sup>おこな</sup> 罪を行 <sup>もの</sup> う者を <sup>す</sup> 棄てずして、<sup>そのすくい</sup> 其 <sup>ため</sup> 救の爲に

<sup>つうかい</sup> 痛悔を立て、<sup>た</sup> 我等 <sup>われらいや</sup> 卑しくして <sup>ふとう</sup> 不當なる <sup>なんぢ</sup> 爾の <sup>しよぼく</sup> 諸僕を、<sup>こ</sup> 此の <sup>とき</sup> 時に <sup>おい</sup> 於ても、<sup>なんぢ</sup> 爾が

<sup>せい</sup> 聖なる <sup>さいだん</sup> 祭壇の <sup>こうえい</sup> 光榮の <sup>まえ</sup> 前に <sup>た</sup> 立ちて、<sup>なんぢ</sup> 爾に <sup>とうぜん</sup> 當然の <sup>ふくはいさんえい</sup> 伏拜讚榮を <sup>たてまつ</sup> 奉るに <sup>た</sup> 堪うる

<sup>もの</sup> 者となし <sup>しゅさい</sup> し主宰よ、<sup>なんぢみづか</sup> 爾親ら <sup>われらざいにん</sup> 我等罪人の <sup>くち</sup> 口よりも <sup>せいさん</sup> 聖三の <sup>うた</sup> 歌を受け、<sup>う</sup> 爾の

<sup>じんじ</sup> 仁慈を以て <sup>もつ</sup> 我等に <sup>われら</sup> 臨み、<sup>のぞ</sup> 我等に <sup>およ</sup> 凡そ <sup>じゆう</sup> 自由と <sup>じゆう</sup> 自由ならざる <sup>つみ</sup> 罪を <sup>ゆる</sup> 赦し、<sup>わ</sup> 我が <sup>たましい</sup> 靈

<sup>からだ</sup> と <sup>せい</sup> 體とを <sup>われら</sup> 聖にし、<sup>しょうがいぜんこう</sup> 我等に <sup>もつ</sup> 生涯善功を以て <sup>なんぢ</sup> 爾に <sup>つと</sup> 務むるを <sup>え</sup> 得せしめ <sup>たま</sup> 給え、<sup>せい</sup> 聖

<sup>しょうしんぢよ</sup> なる <sup>こせい</sup> 生神女と <sup>なんぢ</sup> 古世より <sup>よろこび</sup> 爾の <sup>な</sup> 喜を爲し <sup>しよせいじん</sup> し諸聖人と <sup>きとう</sup> の <sup>よ</sup> 祈禱に <sup>よ</sup> 依りてなり、 )

司祭) <sup>けだしわ</sup> 蓋 <sup>かみ</sup> 我が <sup>なんぢ</sup> 神よ、<sup>せい</sup> 爾は <sup>われら</sup> 聖なり、<sup>こうえい</sup> 我等 <sup>なんぢちち</sup> 光榮を <sup>こ</sup> 爾父と <sup>せいしん</sup> 子と <sup>けん</sup> 聖神に <sup>いま</sup> 献ず、<sup>いつ</sup> 今も <sup>よよ</sup> 何時も <sup>よよ</sup> 世世

に、



ア ミ ン。

【 聖三祝文 】



せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る  
聖 神 聖 勇 毅 聖

じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ れ め  
 常 生 の 者 我 等 を 憐

よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う き、 せい  
 聖 神 聖 勇 毅 聖

なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ れ  
 常 生 の 者 我 等 憐

め よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う き、  
 聖 神 聖 勇 毅

せい なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ  
 聖 常 生 の 者 我 等 憐

れ め よ 。 こう えい は ち ち と こ と せい しん  
 光 榮 父 子 聖 神

に き す、 い ま も い つ も よ よ せ に、 ア ミ ン。  
 歸 今 何 時 世 世

せい なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ  
 聖 常 生 の 者 我 等 憐

れ め よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う  
 聖 神 聖 勇

き、 せい なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を  
 毅 聖 常 生 の 者 我 等

あ わ れ め よ 。  
 憐

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、 )

プロキメン  
【 提綱 使徒の 第7調 】

司祭) つつし き しゅうじん へいあん  
慎みて聴くべし、衆人に平安、

誦經) なんぢ しん  
爾の神にも、

司祭) えいち  
睿智、

誦經) プロキメン、第七の調、諸侯相議りて主を攻め、其膏つけられし者を攻む。

しよこう あいはかりてしゅをせめ、そのあぶ  
諸侯 相議 主 攻 其 膏  
らつけられしものをせむ。  
者 攻

誦經) しよみんなんす さわ しよぞくなんす いたづら はか  
諸民何爲れぞ騒ぎ、諸族何爲れぞ徒に謀る。

しよこう あいはかりてしゅをせめ、そのあぶ  
諸侯 相議 主 攻 其 膏  
らつけられしものをせむ。  
者 攻

誦經) しよこうあいはか しゅ せ  
諸侯相議りて主を攻め、

そのあぶらつけられしものをせむ。  
其 膏 者 攻

アポストロス  
【 使徒經 149端 コリント前書 11章 23~32節 】

司祭) えいち  
睿智、

誦經) せいしと じん たつ ぜんしよ よみ  
聖使徒パウエルがコリント人に達する前書の讀、

司祭) つつし き  
謹みて聴くべし、

誦經) けいてい わ なんぢら つた こと われ しゅ う ところ すなわちしゅ わた  
兄弟よ、我が爾等に傳えし事は、我の主より受けし所なり、即主イイスは付  
さるる其夜に、餅を取り、感謝して之を擘きて曰えり、取りて食べ、此れ我の體爾等の  
ためさるるものなんぢらこれおこなわれきねんおなばんさんのちしゃくと  
爲に擘かるる者なり爾等此を行いて我を記念せよ。同じく晚餐の後に爵を執りて

い えり、此の 爵 は 乃 新約、我が血を以て立つる者なり、<sup>なんぢらこれ おこな</sup> 爾 等此を行いて、飲む毎  
<sup>われ きねん</sup> に我を記念せよと。<sup>けだしなんぢらこ</sup> 蓋 爾等此の餅を食ひ、<sup>パン くら</sup> 此の 爵 を飲む毎に、<sup>こ しゃく の</sup> 主の死を示して、<sup>ご と</sup> 其  
<sup>きた</sup> 来る時に及ばん。<sup>とき およ</sup> 故に宜しきに合わずして、<sup>ゆえ よろ</sup> 此の餅を食ひ、<sup>かな</sup> 或は主の 爵 を飲む者は、<sup>こ しゃく の</sup>  
<sup>しゅ</sup> 主の體と血とに罪を負うなり。<sup>つみ お</sup> 人 自ら省みて、<sup>ひとみづか</sup> 然る後此の餅より食ひ、<sup>かえり</sup> 此の 爵 より  
<sup>しか</sup> 飲むべし。<sup>のちこ</sup> 蓋 宜しきに合わずして食ひ飲む者は、<sup>パン くら</sup> 己の爲に定罪を食ひ飲むなり、<sup>こ しゃく</sup> 主の  
<sup>の</sup> 體を 辨えざるを以てなり。<sup>けだしよろ</sup> 此に縁りて 爾等の中に弱き者及び病む者多く、<sup>かな</sup> 寝る者も  
<sup>くら</sup> 少からず。<sup>もの</sup> 蓋 若し我等己を辨えしならば、<sup>おのれ</sup> 審を受けざりしならん。<sup>ため ていざい</sup> 然れども 審せ  
<sup>くら</sup> られて、<sup>しゅ</sup> 主より 懲を受く、<sup>こらし う</sup> 世と與に定罪せられざらん爲なり。<sup>ため</sup>

【 アリルイヤ 第6調 】

司祭) <sup>なんぢ へいあん</sup> 爾に平安、

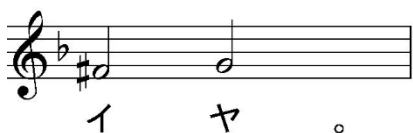
誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>だいろく しらべ まづ</sup> アリルイヤ、第六の調、<sup>ものとぼ</sup> 貧しき者乏しき者を顧みる人は <sup>もの かえり</sup> 福なり、<sup>ひと</sup> 患難の日に主 <sup>さいわい</sup>  
<sup>かんなん ひ</sup> は彼を救わん。<sup>しゅ</sup>



誦經) <sup>われ てき わ</sup> 我の敵は我が事を悪言して曰う、<sup>こと</sup> 彼は何の時に死して、<sup>あくげん</sup> 其名滅びん。<sup>い</sup>



誦經) <sup>わ</sup> 我が餅を食ひし者も亦我に向いて其 <sup>パン くら</sup> 踵を挙げたり。<sup>もの</sup>



司祭) ( 黙誦：人<sup>ひと</sup>を愛<sup>あい</sup>する主<sup>しゅ</sup>宰<sup>さい</sup>よ、我<sup>わ</sup>が心<sup>こころ</sup>に神<sup>かみ</sup>を知<sup>し</sup>る智<sup>ち</sup>慧<sup>え</sup>の 淨<sup>い</sup>き光<sup>き</sup>を輝<sup>ひ</sup>かし、我<sup>わ</sup>が思<sup>し</sup>念<sup>ねん</sup>の目<sup>め</sup>を啓<sup>ひら</sup>きて、爾<sup>なんぢ</sup>が福<sup>ふく</sup>音<sup>いん</sup>の教<sup>おしえ</sup>を悟<sup>さと</sup>らしめ給<sup>たま</sup>え、我<sup>わ</sup>が衷<sup>うち</sup>に爾<sup>なんぢ</sup>の福<sup>ふく</sup>たる 誠<sup>いましめ</sup>

を畏<sup>おそ</sup>るる 畏<sup>おそれ</sup>をも入<sup>い</sup>れて、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>が 悉<sup>ことごと</sup>くの肉<sup>にく</sup>體<sup>たい</sup>の慾<sup>よく</sup>を踏<sup>ふ</sup>み、凡<sup>およ</sup>そ爾<sup>なんぢ</sup>の喜<sup>よろこ</sup>ぶ

ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ

よ、爾<sup>なんぢ</sup>は我<sup>わ</sup>が 靈<sup>たましい</sup>と體<sup>からだ</sup>との光<sup>こうしょう</sup>照<sup>われ</sup>なり、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>爾<sup>なんぢ</sup>と爾<sup>なんぢ</sup>の無<sup>むげん</sup>原<sup>ちち</sup>の父<sup>しせい</sup>と至<sup>し</sup>聖<sup>せい</sup>至<sup>せい</sup>

善<sup>ぜん</sup>にして生<sup>いのち</sup>命<sup>ほどこ</sup>を施<sup>なんぢ</sup>す 爾<sup>しん</sup>の神<sup>こうえい</sup>とに光<sup>けん</sup>榮<sup>いま</sup>を獻<sup>いつ</sup>ず、今<sup>よよ</sup>も何<sup>なん</sup>時<sup>じ</sup>も世<sup>よ</sup>世<sup>よ</sup>に、ア<sup>あ</sup>ミ<sup>ん</sup>。 )

【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書 107 端 マトフェイ 26 章 1～20 節、イオアン 13 章 3～17 節、マ  
トフェイ 26 章 21～39 節、ルカ 22 章 43～44 節、マトフェイ 26 章 40 節～27 章 2 節 】

司祭) 睿<sup>えい</sup>智<sup>ち</sup>、肅<sup>つし</sup>みて立<sup>た</sup>て聖<sup>せい</sup>福<sup>ふく</sup>音<sup>いん</sup>經<sup>けい</sup>を聴<sup>き</sup>くべし、衆<sup>しゅうじん</sup>人<sup>へいあん</sup>に平<sup>へい</sup>安<sup>あん</sup>、



司祭) マトフェイ傳<sup>でん</sup>の聖<sup>せい</sup>福<sup>ふく</sup>音<sup>いん</sup>經<sup>けい</sup>の讀<sup>よみ</sup>、



司祭) 謹<sup>つし</sup>みて聴<sup>き</sup>くべし、主<sup>しゅ</sup>は其<sup>その</sup>門<sup>もん</sup>徒<sup>と</sup>に謂<sup>い</sup>えり、爾<sup>なんぢ</sup>等<sup>ら</sup>知<sup>し</sup>る、二<sup>ふつ</sup>日<sup>か</sup>の 後<sup>のち</sup>は 逾<sup>パス</sup>越<sup>ハ</sup>節<sup>ひと</sup>なり、人<sup>ひと</sup>の子<sup>こ</sup>は

十<sup>じゅう</sup>字<sup>じ</sup>架<sup>か</sup>に釘<sup>てい</sup>せらるる爲<sup>ため</sup>に付<sup>わた</sup>されん。其<sup>その</sup>時<sup>とき</sup>司<sup>し</sup>祭<sup>さい</sup>諸<sup>しよ</sup>長<sup>ちやう</sup>と學<sup>がく</sup>士<sup>し</sup>等<sup>ら</sup>と民<sup>たみ</sup>の長<sup>ちやう</sup>老<sup>らう</sup>等<sup>ら</sup>とは、カ

イア<sup>な</sup>フアと名<sup>し</sup>づくる司<sup>し</sup>祭<sup>さい</sup>長<sup>ちやう</sup>の中<sup>ちゆう</sup>庭<sup>てい</sup>に集<sup>あつ</sup>まり、詭<sup>あざ</sup>計<sup>むき</sup>を用<sup>もち</sup>いてイイ<sup>とら</sup>ススを執<sup>これ</sup>えて、之<sup>こ</sup>を殺<sup>ころ</sup>

さん<sup>は</sup>と謀<sup>ただ</sup>れり。唯<sup>まつり</sup>日<sup>おい</sup>えり、節<sup>お</sup>期<sup>そ</sup>に於<sup>お</sup>てすべからず、恐<sup>たみ</sup>らくは民<sup>うち</sup>の中<sup>らん</sup>に亂<sup>おこ</sup>は起<sup>こ</sup>らん。イイ

ス ヴィタニヤに於て、癩者シモンおい らいしゃの家に在りし時、一いえ あの婦とき ひとり價おんなあたい貴いたうとき香においあぶら膏もを盛れ  
 る玉ぎよくの盒うつわを攜たづさえ、彼の席坐かれに就きて、其せきざ首つに沃そのこうべげり。門徒そそ之もんとを見てこれ 熅みりて曰え  
 り、此この糜費ついえを爲すは何なの爲なんぞ、蓋ため此けだしこの香においあぶら膏おおは多くあたいの價うに賣りて、貧まづしき者ものに施  
 すを得えしならん。イススこれ之しを知りて、彼等かれらに謂いえり、何なんぞ婦おんなを擾わづらわす、彼は我かれが爲ために善  
 き功わざを爲なせり、蓋けだしまづ貧ものしき者つねは常なんぢらに爾等ともと偕われにす、我つねは常なんぢらに爾等ともと偕ともにするにあらず。  
 彼は此かれの香こ膏においあぶらを我わが體からだに沃そそぎて、我われを葬ほうむりに備そなえたり。我われ誠まことに爾等なんぢらに語つぐ、全  
 世界せかいの中うち、凡およそ此この福ふくいん音つたの傳ところえられん處こには、此おんなの婦なの爲ことしし事のの述そのきねんべられて其な記念  
 と爲ならん。其時そのとき十二じゅうにの一ひとり、イウダな イスカリオトものと名しさいしづくる者よちよう、司祭ゆ諸長なに往ゆきて、  
 曰いえり、爾等なんぢら我われに幾何いくばくを與あたえんと欲ほつするか、我われ彼かれを爾等なんぢらに付わたさん、彼等かれらは之これに銀ぎん三  
 十じゅうを約やくせり。其時そのときより彼かれを付わたさん爲ために好よき機おりを窺うかがえり。除ぢようせつ酵節はじめの首ひの日もんと、門徒いイ  
 ススに就つきて曰いえり、我等われらが何處いづこに爾なんぢの爲ために逾越節筵パスハを備そなえんことを欲ほつするか。彼曰かれいえ  
 り、城まちに往ゆき、某それがしに至いたりて曰いえ、師しい言わう、我わが時とき近ちかし、我われ門徒もんとと偕ともに爾なんぢの家いえに逾越節筵パスハ  
 を行おこなわんと。門徒もんとイススの命めいぜし如ごとく行おこないて、逾越節筵パスハを備そなえたり。暮くれに及およびて、彼  
 等かれ十二じゅうに門徒もんとと偕ともに席坐せきざせり。イススは、父ちちが萬物ばんぶつを其手そのてに授さづけ、且かつ己おのれが神かみより出いで  
 て、亦また神かみに逝ゆくを知りて、晚餐ばんさんより起たち、其衣そのころもを釋とき、手巾てのごいを取りて、自みづから帶おびにし、  
 次つぎて水みづを盤たらいに盛もりて始はじめて門徒もんとの足あしを濯あらい、帶おびにしたる手巾てのごいを以もつて之これを拭ぬぐえり。シ  
 モンペトルきたに來かれいれるに、彼曰しゆく、主なんぢよ、爾あし我あらが足これを濯こたうか。イスス之いに答こたえて曰いえり、  
 我わが行おこなう所ところは、爾なんぢ今いま知しらず、後のちに之これを悟さとらん。ペトル彼かれに謂いう、爾なんぢ永ながく我わが足あしを  
 濯あらわざらん。イスス答こたえて曰いえり、若もし我われ爾なんぢを濯あらわさば、爾なんぢは我われと分ぶんなし。シモンペ  
 トル彼かれに謂いう、主しゆよ、止ただわ我あしが足あしのみならず、乃すなわち亦また手くびと首こと。イスス之いに謂いう、既すでに洗  
 われたる者ものは、足あしの外ほかに濯あらうを要ようせず、蓋けだし身み皆みな潔いし、爾等なんぢらも潔いし、然しかれども  
 ことごとしかく然あらるには非けだしず。蓋おのれ彼は己うを賣ものらんとする者しを知り、故ゆえに盡ことごとく潔いきには  
 非あらずと云いえり。既すでに彼等かれらの足あしを濯あらいて、己おのれの衣ころもを衣き、復また席坐せきざして、彼等かれらに謂いえり、我  
 が爾等なんぢらに行おこないし事ことを知るか。爾等なんぢら我われを呼よびて師しと爲なし、主しゆと爲なす、爾等なんぢらの言いう所ところ善

けだしわれ これ ゆえ も われ しゆまたし なんぢら あし あら なんぢら  
し、蓋 我は是なり。故に若し我、主又師たるに、爾等の足を濯いしならば、爾等も  
たがい あし あら けだしわれなんぢら もはん あた わ なんぢら おこな ごと なんぢ  
互に足を濯うべし。蓋 我 爾等に模範を與えたり、我が 爾等に行いし如く、爾  
ら おこな ため われまこと まこと なんぢら つ ぼく そのしゆ おおい ししや これ  
等も行わん爲なり。我 誠に誠に爾等に語り、僕は其主より大ならず、使者は之  
をつかわ もの おおい なんぢらも これ し これ おこな さいわい しょく  
を遣しし者より大ならず。爾等若し之を知りて、之を行わば、福なり。食する  
とき きれい われまこと なんぢら つ なんぢら うち ひとり われ う かれらおおい うれ  
時、彼曰えり、我 誠に爾等に語り、爾等の中の一人は我を賣らん。彼等大に憂い  
て、各 彼に謂えり、主よ、是れ我に非ずや。答えて曰えり、我と偕に手を盂に著けし者  
は、此の人 我を賣らん。人の子は逝く、之を指して録されしが如し、唯 人の子を賣る者は  
わざわい かな こ ひとつま かれ ため よ かれ う と  
禍なる哉、斯の人生れざりしならば、彼の爲に善かりしならん。彼を賣るイウダも問い  
て曰えり、夫子、是れ我に非ずや。曰く、爾言えり。彼等が 食する時、イイス 餅を  
と しゆくふく これ さ もんと あた い と くら こ われ たい またしやく  
取り、祝福して、之を擘き、門徒に與えて曰えり、取りて食え、是れ我の體なり。又 爵  
と かんしゃ かれら あた い みなこれ の けだしこ われ しんやく ち おお ひと  
を取り、感謝して彼等に與えて曰えり、皆之を飲め、蓋 是れ我の新約の血、衆くの人  
のため なが もの つみ ゆるし う いた われなんぢら つ いま のち われまたこ ぶどう  
の爲に流さるる者、罪の赦を得るを致す。我 爾等に語り、今より後、我復此の葡萄  
みの の わ ちち くに おい なんぢら とも あたら もの の ひ いた すで  
の實より飲まずして、我が父の國に於て、爾等と偕に、新しき者を飲む日に至らん。既  
うた エレオンざん ゆ そのとき かれら い なんぢらみなこんやわれ ため つまづ  
に詠いて、橄欖山に往けり。其時イイス 彼等に謂う、爾等皆今夜我の爲に躓かん、  
けだししる われぼくしゃ う しこう むれ ひつじ ち わ ふくかつ のち われなんぢ  
蓋 録せるあり、我 牧者を撃たん、而して群の羊は散らんと。我が復活の後、我 爾  
ら さき ゆ かれ こた い みななんぢ ため つまづ われ  
等に先だちてガリレヤに往かん。ペトル彼に答えて曰えり、皆 爾の爲に躓くとも、我は  
なが つまづ かれ い われまこと なんぢ つ こんやにわとり な さき  
永く躓かざらん。イイス 彼に謂えり、我 誠に爾に語り、今夜 鷄の鳴かざる先に、  
なんぢ み たびわれ い かれ い われなんぢ とも し なんぢ い もんと  
爾 三 次 我を諱まん。ペトル彼に謂う、我 爾と偕に死すとも、爾を諱まざらん、門徒  
みなまたか ごと い そのとき かれら とも な ところ きた  
皆亦是くの如く言えり。其時イイス 彼等と偕に、ゲッシマニと名づくる處に來りて、  
もんと い なんぢらここ ざ わ かしこ ゆ いの ま すなわち およ  
門徒に謂う、爾等此に坐して、我が彼處に往きて祈るを待て。乃 ペトル及びゼヴェデイ  
ふたり こ たづさ うれいかなしみ もよお とき かれら い わ たましいうれ  
の二人の子を攜えて、憂 哀を催せり。時にイイス 彼等に謂う、我が 靈 憂いて  
し ちか なんぢらここ あ われ とも けいせい すなわちすこ はな ふふく  
死に近づけり、爾等此に在りて、我と偕に徹醒せよ。乃 少しく離れて、俯伏して、  
いの い わ ちち も よく ねが こ さかづき われ す しか わ  
祈りて曰えり、我が父よ、若し能すべくば、願わくは此の 爵は我を過ぎん、然れども、我  
ほつ ごと なんぢ ほつ ごと てんし てん あらわ かれ かた  
が欲する如くならずして、爾の欲する如くなるべし。天使は天より現れて、彼を堅め

たり。彼痛く哀<sup>かなし</sup>みて、禱<sup>いの</sup>ること愈<sup>いよいよ</sup>切<sup>せつ</sup>なり、其汗<sup>そのあせ</sup>は血<sup>ち</sup>の滴<sup>したたり</sup>の如<sup>ごと</sup>く地<sup>ち</sup>に下<sup>くだ</sup>れり。遂<sup>つい</sup>  
に門徒<sup>もんと</sup>に來<sup>きた</sup>りて、其寢<sup>そのい</sup>めるを見て、ペトルに謂<sup>み</sup>う、爾<sup>い</sup>等斯<sup>なんぢ</sup>く一<sup>いち</sup>時<sup>じ</sup>も我<sup>われ</sup>と偕<sup>とも</sup>に徹<sup>けいせい</sup>醒<sup>せい</sup>する能<sup>あた</sup>  
わざりしか。徹<sup>けいせい</sup>醒<sup>せい</sup>せよ、祈<sup>きとう</sup>禱<sup>とう</sup>せよ、誘<sup>いざない</sup>惑<sup>い</sup>に入<sup>ため</sup>らざらん爲<sup>しん</sup>なり、神<sup>いさ</sup>は勇<sup>いさ</sup>めども、肉<sup>にく</sup>體<sup>たい</sup>は弱<sup>よわ</sup>  
し。再<sup>ふたたび</sup>往<sup>ゆ</sup>きて、復<sup>また</sup>祈<sup>いの</sup>りて曰<sup>い</sup>えり、我<sup>わ</sup>が父<sup>ちち</sup>よ、若<sup>も</sup>し此<sup>こ</sup>の爵<sup>さかづき</sup>、我<sup>われ</sup>之<sup>これ</sup>を飲<sup>の</sup>まずして、我<sup>われ</sup>を過<sup>す</sup>  
ぐる能<sup>あた</sup>わらずば、爾<sup>なんぢ</sup>の旨<sup>むね</sup>成<sup>な</sup>るべし。來<sup>きた</sup>りて、復<sup>また</sup>彼<sup>か</sup>等<sup>ら</sup>の寢<sup>い</sup>めるを見る、其<sup>み</sup>目<sup>め</sup>倦<sup>そのめう</sup>みたればなり。  
彼<sup>か</sup>等<sup>ら</sup>を離<sup>はな</sup>れて、復<sup>また</sup>往<sup>ゆ</sup>き、同<sup>おな</sup>じき言<sup>ことば</sup>を言<sup>い</sup>いて、三<sup>み</sup>次<sup>たび</sup>祈<sup>いの</sup>れり。其<sup>その</sup>時<sup>とき</sup>門徒<sup>もんと</sup>に來<sup>きた</sup>りて、之<sup>これ</sup>に謂<sup>い</sup>  
う、爾<sup>なんぢ</sup>等<sup>ら</sup>尚<sup>やす</sup>寢<sup>み</sup>ねて休<sup>とき</sup>むか、視<sup>ちか</sup>よ、時<sup>ひと</sup>は邇<sup>こ</sup>づけり、人<sup>ざい</sup>の子<sup>にん</sup>は罪<sup>て</sup>人<sup>わた</sup>の手に付<sup>お</sup>さる。起<sup>お</sup>きよ、  
往<sup>ゆ</sup>かん、視<sup>み</sup>よ、我<sup>われ</sup>を付<sup>わた</sup>す者<sup>もの</sup>は近<sup>ちか</sup>づけり。彼<sup>かれ</sup>が尚<sup>なお</sup>言<sup>とき</sup>う時<sup>み</sup>、視<sup>じゆう</sup>よ、十二<sup>じふに</sup>の一<sup>いつ</sup>なるイウダは  
來<sup>きた</sup>り、劍<sup>つるぎ</sup>と棒<sup>ぼう</sup>とを持<sup>も</sup>てる多<sup>おほ</sup>くの民<sup>たみ</sup>、司<sup>し</sup>祭<sup>さい</sup>諸<sup>しよ</sup>長<sup>ちやう</sup>及<sup>およ</sup>び民<sup>たみ</sup>の長<sup>ちやう</sup>老<sup>ろう</sup>等<sup>ら</sup>より遣<sup>つか</sup>されし者<sup>もの</sup>は、  
彼<sup>かれ</sup>と偕<sup>とも</sup>にせり。イイススを付<sup>わた</sup>す者<sup>もの</sup>彼<sup>か</sup>等<sup>ら</sup>に號<sup>しるし</sup>を與<sup>あた</sup>えて曰<sup>い</sup>えり、我<sup>わ</sup>が接<sup>せつ</sup>吻<sup>ぶん</sup>せん者<sup>もの</sup>は即<sup>すなわ</sup>ち斯<sup>こ</sup>  
の人<sup>ひと</sup>なり、彼<sup>かれ</sup>を執<sup>とら</sup>えよと。直<sup>ただ</sup>にイイススに就<sup>つ</sup>きて曰<sup>い</sup>えり、夫子<sup>らヴィ</sup>、慶<sup>よろこ</sup>べよ、乃<sup>すなわ</sup>ち彼<sup>かれ</sup>に接<sup>せつ</sup>吻<sup>ぶん</sup>  
せり。イイスス之<sup>これ</sup>に謂<sup>い</sup>えり、友<sup>とも</sup>よ、胡<sup>なんす</sup>爲<sup>きた</sup>れぞ來<sup>その</sup>れる。其<sup>その</sup>時<sup>とき</sup>彼<sup>か</sup>等<sup>ら</sup>就<sup>つ</sup>きて、手<sup>て</sup>をイイススに措<sup>お</sup>き  
て、之<sup>これ</sup>を執<sup>とら</sup>えたり。視<sup>み</sup>よ、イイススと偕<sup>とも</sup>に在<sup>あ</sup>りし一<sup>ひとり</sup>人<sup>て</sup>、手<sup>の</sup>を伸<sup>その</sup>べ、其<sup>その</sup>劍<sup>つるぎ</sup>を抜<sup>ぬ</sup>きて、司<sup>し</sup>祭<sup>さい</sup>長<sup>ちやう</sup>  
の僕<sup>ぼく</sup>を撃<sup>う</sup>ちて、其<sup>その</sup>耳<sup>みみ</sup>を削<sup>そ</sup>げり。イイスス彼<sup>かれ</sup>に謂<sup>い</sup>う、爾<sup>なんぢ</sup>の劍<sup>つるぎ</sup>を其<sup>その</sup>處<sup>ところ</sup>に歸<sup>かえ</sup>せ、蓋<sup>けだし</sup>凡<sup>およ</sup>そ  
劍<sup>つるぎ</sup>を執<sup>と</sup>る者<sup>もの</sup>は劍<sup>つるぎ</sup>にて亡<sup>ほろ</sup>びん。或<sup>ある</sup>は爾<sup>なんぢ</sup>は、我<sup>われ</sup>今<sup>いま</sup>我<sup>わ</sup>が父<sup>ちち</sup>に求<sup>もと</sup>めて、彼<sup>かれ</sup>をして我<sup>われ</sup>に十<sup>じゆう</sup>  
二<sup>に</sup>軍<sup>ぐん</sup>餘<sup>よ</sup>の天<sup>てん</sup>使<sup>し</sup>を遣<sup>つか</sup>しむること能<sup>あた</sup>わずと意<sup>おも</sup>うか。然<sup>しか</sup>らば聖<sup>せい</sup>書<sup>しよ</sup>に、斯<sup>か</sup>くあるべしと、言<sup>い</sup>える  
こと如何<sup>いかな</sup>ぞ應<sup>その</sup>わん。其<sup>その</sup>時<sup>とき</sup>イイスス民<sup>たみ</sup>に謂<sup>い</sup>えり、爾<sup>なんぢ</sup>等<sup>ら</sup>は盜<sup>ぬす</sup>賊<sup>びと</sup>に向<sup>むか</sup>う如<sup>ごと</sup>く、劍<sup>つるぎ</sup>と棒<sup>ぼう</sup>とを  
持<sup>も</sup>ちて、我<sup>われ</sup>を捕<sup>とら</sup>えん爲<sup>ため</sup>に出<sup>い</sup>でたり、我<sup>われ</sup>日<sup>ひ</sup>日<sup>び</sup>殿<sup>でん</sup>の中<sup>うち</sup>に誨<sup>おし</sup>えて、爾<sup>なんぢ</sup>等<sup>ら</sup>と偕<sup>とも</sup>に坐<sup>ざ</sup>せしに、爾<sup>なんぢ</sup>  
等<sup>ら</sup>我<sup>われ</sup>を執<sup>とら</sup>えざりき。此<sup>こ</sup>れ皆<sup>みな</sup>成<sup>な</sup>りしは、諸<sup>しよ</sup>預<sup>よげん</sup>言<sup>しゃ</sup>者<sup>しよ</sup>の書<sup>かな</sup>に應<sup>いた</sup>うを致<sup>その</sup>す。其<sup>その</sup>時<sup>とき</sup>門徒<sup>もんと</sup>皆<sup>みな</sup>彼<sup>かれ</sup>を遣<sup>す</sup>  
てて奔<sup>はし</sup>れり。イイススを執<sup>とら</sup>えたる者<sup>もの</sup>彼<sup>か</sup>れを曳<sup>ひ</sup>きて、司<sup>し</sup>祭<sup>さい</sup>長<sup>ちやう</sup>カニアファの許<sup>もと</sup>に至<sup>いた</sup>れり、彼<sup>か</sup>處<sup>こ</sup>に  
は學<sup>がく</sup>士<sup>し</sup>及<sup>およ</sup>び長<sup>ちやう</sup>老<sup>ろう</sup>等<sup>ら</sup>已<sup>あつ</sup>まに集<sup>と</sup>れり。ペトル遠<sup>とお</sup>く彼<sup>かれ</sup>に隨<sup>したが</sup>いて、司<sup>し</sup>祭<sup>さい</sup>長<sup>ちやう</sup>の中<sup>ちゆう</sup>庭<sup>てい</sup>に至<sup>いた</sup>り、  
其<sup>その</sup>おわり<sup>み</sup>を觀<sup>ため</sup>ん爲<sup>うち</sup>に内<sup>い</sup>に入りて、下<sup>した</sup>吏<sup>やく</sup>等<sup>ら</sup>と偕<sup>とも</sup>に坐<sup>ざ</sup>せり。司<sup>し</sup>祭<sup>さい</sup>諸<sup>しよ</sup>長<sup>ちやう</sup>、長<sup>ちやう</sup>老<sup>ろう</sup>等<sup>ら</sup>、及<sup>およ</sup>び全<sup>ぜん</sup>公<sup>こう</sup>  
會<sup>かい</sup>は、イイススを死<sup>し</sup>に致<sup>いた</sup>さん爲<sup>ため</sup>に、彼<sup>かれ</sup>に對<sup>たい</sup>する妄<sup>もう</sup>證<sup>しやう</sup>を求<sup>もと</sup>められたれども、得<sup>え</sup>ざりき、多<sup>おほ</sup>くの  
妄<sup>もう</sup>證<sup>しやう</sup>者<sup>しやつ</sup>就<sup>え</sup>きたれども、得<sup>つ</sup>ざりき。終<sup>つい</sup>に二<sup>ふた</sup>の妄<sup>もう</sup>證<sup>しやつ</sup>者<sup>い</sup>就<sup>わ</sup>きて曰<sup>こ</sup>く、斯<sup>ひと</sup>の人<sup>われ</sup>言<sup>い</sup>えり、我<sup>わ</sup>は

かみ でん こぼ みつか これ た よく さいしちやうた かれ い なんぢこた  
 神の殿を毀ち、三日にして之を建つるを能すと。司祭長立ちて、彼に謂えり、爾答う  
 ところ なきか、かれら なんぢ たい しょう ところいかん もくねん さいしちやうかれ  
 る所なきか、彼等が爾に對して證する所如何。イスス默然たり。司祭長彼に  
 い われい かみ もつ なんぢ ちか われら つ なんぢ かみ こ  
 謂えり、我活ける神を以て爾に誓わしむ、我等に告げよ、爾は神の子ハリストスなるか。  
 これ い なんぢい かつわれなんぢら つ これ のち なんぢら ひと こ だいのう  
 イスス之に謂う、爾言えり、且我爾等に語ぐ、此より後、爾等は人の子が大能の  
 みぎ ざ てん くも の きた み そのときさいしちやうおのれ ころも さ い かれ かみ  
 右に坐し、天の雲に乗りて來るを見ん。其時司祭長己の衣を裂きて曰へり、彼は神  
 けが なん またしょうしゃ もと み いまなんぢら そのかみ けが き なんぢらいか  
 を瀆せり、何ぞ復證者を求めん、視よ、今爾等は其神を瀆すを聞けり。爾等如何に  
 おも かれらこた い し あた ここ おい かれらそのおもて つばき かれ う あるもの  
 意うか。彼等答えて曰えり、死に當る。是に於て彼等其面に唾し、彼を撃ち、或者  
 そのほほ う い われら よげん なんぢ う もの だれ とき  
 は其頬を批ちて曰えり、ハリストスよ、我等に預言せよ、爾を撃ちし者は誰ぞ。時にペト  
 そと ちゆうてい ざ ひとり しもめかれ つ いわ なんぢ とも あ  
 ル外に中庭に坐せるに、一人の婢彼に就きて曰く、爾もガリレヤのイススと偕に在  
 りき。然れども彼は衆の前に諱みて曰えり、我爾が言う所を識らず。彼が門を出づる  
 とき た しもめかれ み かしこ あ もの い こ ひと とも あ かれ  
 時、他の婢彼を見て、彼處に在る者に謂う、此の人もイススナズレイと偕に在りき。彼  
 またい ちか い われその ひと し しばらく かしこ た ものちか  
 復諱みて、誓いて曰えり、我其の人を識らず。少頃ありて、彼處に立てる者近づきて、ペ  
 い まこと なんぢ そのともがら ひとり けだしなんぢ ことば なんぢ あらわ そのときかれ  
 トルに謂えり、誠に爾も其黨の一人なり、蓋爾の言語も爾を顯す。其時彼  
 のろ かつちか われそのひと し たちまちにわとりな かれ にわとり  
 は詛い且誓えり、我其人を識らずと。忽鷄鳴けり。ペトルはイススの彼に、鷄  
 な さき なんぢ み たびわれ い い ことば おも おこ そと い いた な  
 の鳴かざる先に、爾三次我を諱まんと、云いし言を憶い起して、外に出でて、痛く哭  
 けり。平旦に及びて、司祭諸長と民の長老等と皆相會して、イススの事を議せり、  
 これ し いた ため すなわちこれ しば ひ ほうはく わた  
 之を死に致さん爲なり。乃之を縛りて、曳きて、方伯ポンテイピラトに解せり。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
 主 光 榮 爾 歸 光 榮  
 はなんぢにきす。  
 爾 歸

※ 聖体礼儀③ (大ヴァシリイの聖体礼儀) へ

※ 「ヘルヴィムの歌」に代えて

か みの 子 よ 、 い ま わ れ を な ん ぢ が  
 神 子 今 我 爾

き み つ の え ん に あ づ か る も の と し て  
 機 密 筵 與 者

い れ た ま え 、 け だ し わ れ な ん ぢ の  
 容 給 蓋 我 爾

あ だ に き み つ を つ げ ざ ら ん 、 ま た な ん ぢ に  
 仇 機 密 告 又 爾

イ ウ ダ の ご と き せ っ ぶ ん を な さ ざ  
 如 接 吻 爲

ら ん 、 す な わ ち と う ぞ く の ご と く  
 乃 盜 賊 如

な ん ぢ を う け み と め て い う 。  
 爾 承 認 曰

※ 大聖入後

し ゅ よ 、 な ん ぢ の く に に お いて わ  
 主 爾 國 於 我

れ を き お く せ よ 。  
 記 憶

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル

イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ

※ 「常に福にして」に代えて

しんじゃよ、きたりて、たか  
信者 来 高  
きを、あおぐちえをもつて、  
仰 智 慧 以  
たかきところにも設うけ  
高 處 設  
られたるしゅさいの  
主 宰  
もてなしとふしのえんとを  
優 款 不 死 宴  
たのしみ、わがほめあぐる  
樂 我 讚 揚  
ることばにおしえられて  
言 教  
きたりしことばをさと  
来 言 悟  
らん。

※ 領聖詞及び「主よ願わくは我が口は讚美に満てられて」に代えて

か みの こ よ 、 い ま わ れ を な ん ち が  
 神 子 今 我 爾

き み つ の え ん に あ づ か る も の と し て  
 機 密 筵 與 者

い れ た ま え 、 け だ し わ れ な ん ち の  
 容 給 蓋 我 爾

あ だ に き み つ を つ げ ざ ら ん 、 ま た な ん ち に  
 仇 機 密 告 又 爾

イ ウ ダ の ご と き せ っ ぶ ん を な さ ぎ  
 如 接 吻 爲

ら ん 、 す な わ ち と う ぞ く の ご と く  
 乃 盜 賊 如

な ん ち を う け み と め て い う 。  
 爾 承 認 曰

し ゅ よ 、 な ん ち の く に に お いて わ 我  
 主 爾 國 於

れ を き お く せ よ 。  
 記 憶

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル

イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。